
座敷牢

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

座敷牢

【Nコード】

N2571P

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

屋敷の離れにある蔵の下にあるものとは。かつてはこうした話も実際にあったのかも知れません。

第一章

座敷牢

この話が何時の時代のものか、最早知る者はいない。

おそらく昭和の初期だっただろう。だがそれもはつきりと言える者はいなくなった。とにかくそれだけ人々の記憶から忘れられた、忘れられなくてはならない話だった。

旧家であった。しかし見事な家であった。そこにある書生が入った。

名を浜口金之助という。将来有望とされている青年であり帝大に通っている。縁あってこの家に部屋を借りてそこから大学に通うことになったのだ。

家の者達は彼に非常によくしてくれた。御馳走や服だけでなく、学費はおろか本を買う金、遊興費まで出してくれた。これには彼も驚いた。

しかし家の主、厳しい顔をしてカイゼル髭を生やしつつも和服を着ている彼はだ。彼に対してその厳しい声でこう言うのだった。

「それは気にしなくていい」

「気にしなくてですか」

「そうだ、いい」

こう言うのである。

「そんなものは我が家にとってはどうでもいいことだ」

「お金のことはですか」

「金は我が家には幾らでもある」

だからだというのである。

「だからだ。気にしなくていい」

「それはまことですか」

「嘘を言うこともない」

主はまた言った。その厳しい声でだ。

「そういうことだ。わかつたな」

「わかりました。それでは」

「君はそのまま学問に励むのだ」

「それでいいですね」

「学生の本分は学問だ」

古来より言われていることもだ。告げたのである。

「だからだ。頑張るようにな」

「わかりました、それでは」

こうしてであつた。彼は何不自由なく屋敷に置かれた。この家は酒問屋であり確かに裕福であつた。屋敷には多くの使用人達だけでなく主の家族もいた。その妻に娘達だ。娘達ばかりが四人もいて誰もまだ結婚していない。しかしであつた。

「下の三人の方々はです」

「もうお相手が決まっています」

「許婚が」

古く家柄もある裕福な家だ。許婚がいるのも当然であつた。

「しかし長女様はです」

「まだ決まっていないのですよ」

「相手が誰かいればいいのですが」

使用人達はこんな話をするのであつた。そしてだ。

自然と金之助についてだ。ひそひそであるがそれでも話をするのであつた。

「浜口さんならどうか」

「ああ、あの方なら帝大に通つておられるしな」

「若いながら真面目で立派な方だ」

「しかも目鼻立ちも整つてるしな」

「いいな」

こう話す。そしてであつた。

自然とだ。家の主からもだ。こう声をかけられてきた。
「君にはだ」

「はい」

「できればだが」

こう前置きしたうえでだ。そのうえでの言葉だった。

「この家にずっといてもらいたい」

「この家にですか」

「そうだ、ずっとだ」

こう告げるのである。

「ずっといてもらいたい」

「私さえよければですね」

「そうだ、いってくれ」

主はまた彼に告げた。

「できればだ」

「はい、それでは」

彼は即答は避けた。しかしそれでも言うのだった。

「考えさせてもらいます」

「遠慮はいらん」

こうも言うのだった。

「全くだ。この屋敷を自分の家だと思ってくれ」

「この家ですか」

「そうだ、自分のものと思ってくれ」

また金之助に話す。

「わかったな」

「ではその言葉」

金之助は謙虚にだ。こう主に返した。

第二章

「謹んで考えさせてもらいます」

「そうしてくれ。何時何処を見回ってもいいからな」

主はお墨付きまで与えた。こうして彼は実質的に家の婿養子にも認められた。それから家の中での彼の待遇はさらによくなった。

そしてである。彼は屋敷の中を何度も歩き回る。その時にだ。

家の外れの方に倉が幾つもあることはもう知っていた。しかしその一番奥の倉にだ。屋敷の、それも最も長く仕えている婆やが時々出入りするのを見つけたのだ。

最初は何も思わなかった。しかしだ。

あまりにも頻繁に、一日に数回かは出入りしているので彼もだ。

次第に不思議に思った。それで使用人の一人にだ。ふと尋ねたのである。

しかしだ。その使用人にその倉のことを聞いてもだ。こう返すだけであつた。

「さて」

「さて？」

「私は何も知りません」

青い顔で言うのであつた。

「本当に何もです」

「知らない！？」

「はい、知りません」

その青い顔での言葉である。

「ですから何も」

「知らないというのか」

「何も御答えできません」

また言う彼であつた。

「ですから。これで」

「そうなのか」

使用人はここまで話すとすぐに逃げる様に立ち去った。この時は何もわからなかった。

だが大学にいる時にだ。ふとだ。こんな話を同じ学生仲間から聞いたのである。

「君は今四賀家にいるな」

「そうだが？」

「そうか、あの家にか」

その仲間、友人と言すべき彼はだ。代々この辺りに住んでいる。

それでこの生まれではない彼に対してこの土地のことを色々と教えてくれたりするのである。

その彼がだ。ここであることを話してきた。それはだ。

「あくまで噂だ」

「噂か」

「そう、僕も子供の頃少し聞いてそのうえそれから一度も聞いていない噂だ」

こう前置きしてからの言葉であった。

「あの家にはだ」

「何かあるのかい？」

「出るという噂があるんだ」

こう話すのである。

「あそこにはね」

「出るのかい」

「まあこうした噂は何処にでもあるな」

友人はここまで話したうえでこうも述べたのであった。

「実際にな。あそこまで古い家ならな」

「あるか」

「あるものさ。具体的に何が出るというとな」

「君も知らないか」

「ただの噂さ。子供の頃に聞いたな」

友人はここで笑顔になった。そのうえでの言葉であつた。

「だからだ。信憑性についてはだ」

「全くないか」

「ない。まあふと思い出した戯言だと思ってくれ」

そしてこつも話すのであつた。

「そういうことだ」

「わかつた。それではだ」

彼もそれを受けてだ。その時は聞いたただけだつた。しかしそれでも興味を持たないと言えは嘘になる。彼が今実際に住んでいる家だからだ。それも当然だつた。

それでだ。その日から屋敷の中を時間があれば見回してみた。しかし怪しい場所はこれといってなかつた。何しろ使用人の多い屋敷だ。昼にも夜にも何処にでも人がいる。これでは不気味な場所なぞありはしない。

庭も同じだ。常に誰かが掃除をしている。使用人達は最近では彼の顔を見ると悪戯っぽく笑つてだ。こう言ってくるのだった。

「若旦那様、どうも」

「おはようございます」

既に婿入りは決まっているようなものだった。そんな状況にもなつていた。

とにかく広い屋敷だ。しかし何もおかしなところはない。酒蔵もそれを造る場所もだ。何処もおかしなところはない。何かが出ると言われてもだ。全く何も無い。

それで彼も諦めかけていた。そんな時であつた。

ある日の夜だ。彼が家の使用人達と共に飲んでいた。干物をつまみとしてそのうえでだ。酒を楽しんでいた。

第三章

その時に彼はだ。やがて彼に妻になるというこの屋敷の長女の話になっていた。既に同じ部屋で休んでいる。それなりに深い仲になっている。気品があり穏やかでしかも美しい。金之助より二つ年上の女だ。

「いえ、お嬢様はね」

「素晴らしい方ですから」

「是非ですね」

「大切にして下さい」

彼等は酒で赤くなつた顔で彼に話す。その間も酒をどんどん飲んでいく。

「若旦那様も大事にして下さつてますよね」

「今も」

「確かに」

若旦那という言葉にだ。今は自然に反応するようになっていた。そうしながら彼もまた干物をつまみに酒を楽しんでいた。この家の酒である。

「あの人はいい人ですね」

「私達にもお優しくてね」

「公平で」

「この屋敷のお嬢様方はどなたも素晴らしい方ですが」

「ええ」

金之助はこのことも知るようになっていた。やはり屋敷にいるからだ。将来自分の義妹になる彼女達もだ。しっかりとてしかも優しく美しい娘達であるのだ。

その彼女達についての話を聞きながらだ。彼は飲んでいた。使用人達の彼への話はさらに続くのであった。

「いえ、特に一番上のお嬢様ですよ」

「あの方はですね。跡継ぎがあらなくて」
「折角……おつと」

ここで中年の男がふと言葉を止めて打ち消した。

「それで婿入りを待つておられましたので」

「そうだったのですか」

「はい、そうなのですよ」

「そして若旦那様が来られました」

金之助への話にもなる。

「いや、有り難いことです」

「全くです」

「左様ですか」

金之助は今は気付かないふりをしていた。しかし実は先程の折角の後の変化を心の中に留めていた。そうしてそのうえで話を聞いているのであった。

その中でだ。彼等の話をじっくりと聞いていた。注意深くである。使用人達はその彼に気付かずだ。さらに話していた。

「それじゃあ少しな」

「何処に行くんですか？」

「見回つて来る」

初老の使用人が中年の使用人に話していた。

「蔵もな」

「あそこもですか」

「ああ、ちよつと行つて来る」

また言う彼だった。

「開いていたらまずいからな」

「そうですよね、あそこは」

「だからな」

こう話してだった。その初老の使用人はだ。一旦金之助に頭を下げてそのうえで彼に対して言うのであった。金之助には彼がその時何かを隠そうとしているようにも見えた。

「すみません、少し行つて来ます」

「そうですね」

「はい、すぐに戻ります」

こう言つてであつた。一旦その場を後にする。だが金之助はそれを見ていた、見逃さない筈もないことであつた。かなり注意深く見ていたからだ。

こうして彼が去つた後はだ。今度は世間話になつた。

「それでなんですけれど」

「最近小説で面白いものがありますね」

「そうそう、何だつたかな」

「井伏だつたか？」

ある作家の名前が出て来た。使用人達の間でだ。

「井伏鱒二だつたよな」

「あの山椒魚つてのは面白いな」

「結構な」

「若旦那も小説読めますか？」

「旦那様あれで結構読まれるんですよ」

そのうえで彼に話を振つてきた。

「芥川なんか特に好きですし」

「白樺派もよく読めますし」

「そうですね。僕は」

実は彼も読まない訳ではない。するとであつた。彼もこつ話すのだつた。

「川端康成がいいでしょうか」

「川端ですか」

「そつちですか」

「はい、いいと思います」

また話すのだつた。

「あと白樺派ですと武者小路が好きですね」

「ああ、若旦那も結構読まれるんですね」

「小説お好きなんですね」

「小説はいいものですね」

彼は微笑んでこうも話した。

「他には小林秀雄も読みますが」

「あの評論家ですか」

「あの評論はかなり難しいですが」

「それでも読めますか」

「はい、小林秀雄は確かに難しいです」

何故難しいかというところそれは別に主張や書いてある内容がわかりにくいからではない。それとは話が違うのだ。実は小林秀雄の主張は難しくはないのだ。

問題は何かというところである。教養が必要なのだ。

小林秀雄の作品を読むには事前に相当な教養が必要なのだ。それがないと彼の文章や主張は何を言っているのかわからないのだ。

第四章

そしてだ。金之助はここでまた話すのだった。

「ですが。勉強しましたから」

「だからですか」

「おわかりになられるんですね」

「はい、何とかわかります」

こう話すのだった。

「最初読んだ時はかなり戸惑いましたが」

「いや、流石ですね」

「本当です」

「全くだす」

使用人達はここで彼を褒めだした。何割かはお世辞が入っているにしても実際に彼のその教養を認めてそのうえでの言葉である。

「この家を継がれるだけがありますよ」

「やっぱり教養が必要ですからね」

「そうですよね」

こう話してであつた。彼等は楽しく飲んでいた。

そうしてだ。彼は頃合いを見てだ。その蔵に向かった。既に見当はついていた。

見れば蔵に主が入ろうとしていた。それも見えた。

一旦物陰に隠れてだ。様子を窺う。主は蔵の中に入っていく。

彼は意を決して彼も蔵の中に入ることにした。蔵に入るとまずは中に大小幾つかの荷物や道具が置かれていた。それを見るとごくありきたりな蔵だった。

しかしである。その奥に階段があつた。下に向かう階段がそこにあつたのだ。

すぐにその階段に向かう。そうして下を覗く。するとであつた。
「元気か？」

主のあの声が聞こえてきたのだった。

「元気でいるな。ならしい」

こう言うのである。

「ここにいる分にはな」

「元気で？」

金之助はそれを聞いて首を傾げさせた。

「誰かいるのか」

それでだ。中をさらに覗く。階段も降りる。

そしてその下の階を見るとであった。まずは木造の座敷牢が見えた。木の厚い柵が見える。

その向こうに何かがいた。目を凝らして見るとだ。

「これは……」

目が一つしかない。そう、右目があるだけで左目はない。それに右手もない。肘からないのだ。そして両足は足首からない。しかもその片目の表情は虚ろな感じた。彼はそこから白痴めいたものも感じていた。

それを見るとであった。彼は思わず声をあげそうになった。だがそれを何とか止めた。だがここであった。

座敷牢の前に立っている主がだ。こう言ってきたのである。
「いるな」

気付いていたのだ。背を向けたままだが確かに言ってきた。

「そして見たな」

「……」

答えはしない。しかしそれはもう手遅れであった。

そしてだ。主は彼にさらに言ってきたのである。

「どのみち知ってもらうつもりだった。来なさい」

「は、はい」

その言葉を受けて下に降りる。そしてその座敷牢の中をあらあためて見る。見れば服は青い男物だ。ざんぎりの乱れた髪でその白痴めいた右目で彼を見ていた。

歳は十かその辺りだ。彼を見てだ。金之助は思わず言った。

「あの」

「何かだな」

「この子は一体」

「息子だ」

彼はその片目の男の子を見たまま金之助に答えた。

「これはだ。息子だ」

「御子息だったのですか」

「生まれた頃からこうだった」

このことも話すのだった。

「本来は跡継ぎになる予定だった」

「跡継ぎにですか」

「そうだ、跡継ぎになる予定だった」

「そうだったのですか」

「しかしこうではだ」

とてもだというのである。その片目片腕で両足がない。しかも白痴ではというのだ。

第五章

「それどころかとても外に出すのも無理だ」

「それでここに」

「このことを知っているのは家の中でも限られている」

彼はまた話す。

「何人かだけだ。いない」

「秘密というわけですね」

「いないことになっている。誰も知らない」

「けれど僕は」

「何度も言うが何時か言うつもりだった」

また金之助に話す。気付けばであった。蔵の中は異様な匂いに満ちていた。それは何年も風呂に入っていない、まさにそうした匂いであつた。

「しかし今こうして知つたな」

「すいません」

「謝ることはない。知つたのは事実だ」

それはだというのだ。

「わかつたな」

「わかりました」

ただわかつたのではなかった。そこには多くの意味があつた。金之助もそれはわかつてそのうえで頷いたのである。

「それでは」

「さて、出るか」

主は素っ氣無く述べた。

「いいな」

「ここをですね」

「ここには来なかつた」

主はこうも言った。

「君は来なかった」

「そして何も見なかった」

「そうだ」

そういうことになるのだった。金之助は話を聞きながらだ。何もない、何もなかったと己に言い聞かせていた。言い聞かせてそういうことにしてしまったのである。

「わかったな」

「わかりました、そうですね」

「さて、それではだ」

主は彼の方に顔を向けてだ。話を変えてきた。

「飲むか」

「酒をですね」

「そうだ。面白い肴を用意してある」

階段を登りながらの言葉だった。

「それを二人でやろう」

「面白いといえますと」

「来ればわかる。舶来のものでな」

「舶来ですか」

「ついでに言えば酒もそうだ」

それもだというのだ。

「葡萄酒だ。赤だ」

「葡萄酒ですか」

「そちらを仕入れて売ることも考えているからな。そして肴は肉だ」

「肉、ですか」

「その肉を燻製にしたものだ。どうだ」

「面白そうですね、どちらも」

実は金之助はこれまで葡萄酒というものを飲んだことがなかった。肉も殆ど食べたことがない。それを聞けば自然に出て来ることだった。

そうしてその蔵を出て二人で飲むのだった。どれも美味しいものだ

った。そしてその座敷牢への扉は閉じられ蔵には鍵がかけられた。金之助は婿に入り家の主となった。それから長い歳月が経った。戦争がありそれが終わり時が過ぎた。そして残ったのは。

家は今も造り酒屋だ。しかし日本酒以外、ワインも売るようになっていた。そして時代と共に屋敷の土地等売り今は普通の大きな家になっていた。

その家の今の主はだ。客からこんな話を聞いていたのだった。

「昔この家はもっと大きかったよな」

「そうですね」

若いおっとりとした顔の男だった。その彼が客の話を聞いていた。

「今の倍以上はありましたね」

「蔵も幾つかあって」

「僕が生まれた時はもうなかったですけどね」

「そうだったんですか」

「ひい爺様が婿入りしたきた時はそれは凄いものだったそうですが」
「成程」

「戦争があつて」

「まずはそれだった。」

「そこから色々あつて。今はこんなふうです」

「時代が変わればですね」

「そうですね。これが今の我が家です」

笑いながらの言葉である。

第六章

「もう蔵なんて家の中にはありませんしね」

「全部なくなりましたね」

「一つも。ただ」

「ただ？」

「親父から聞いた話ですがね」

「こう前置きしての話だった。」

「端の蔵には出るって聞いてました」

「幽霊がですか」

「はい、出るって聞いてました」

「そうだったというのである。」

「それはね」

「幽霊ですか」

「古い家にはつき物ですね」

「また笑っての言葉になっている。」

「そうした話も」

「確かに。ただ」

「ただ？」

「噂ですしね。実際には幽霊も何もいなかったと思いますよ」

「何もですか」

「親父も何も聞いてませんし」

「父の話もするのだった。」

「全然」

「そうですか、全くですか」

「何もね。ただ」

「ただ？」

「そうした噂が出るには何かがあっただんでしょっね」

「こう客に話すのだった。」

「そう思ったりもします」

「成程」

「さて、それでなんですが」

主はここだ。笑ってまた話してきた。

「今日は何を買いますか？」

「ワインを」

それをだというのだ。

「それを下さい」

「ワインですか」

「それと燻製を」

肴はそれだった。

「それを下さい」

「わかりました。それじゃあそれを」

「ワインは何本で」

「ボトル二本で」

それだけだという。

「それだけ下さい」

「それじゃあ」

「そういえばここは造り酒屋ですが」

客は注文をしたうえでまた言ってきた。

「ワインもよく売ってますね」

「その婿入りしたひい爺様が好きだったんですよ」

「その人がですか」

「ひいひい爺様に飲ませてもらったのを随分と気に入りまして」

だからだというのである。

「それでなんですよ」

「成程、それでなのですね」

「そうです。そこからうちの店ではワインをよく扱うことになりました」

「そっというわけですか」

「今ではワインもかなり売れてますよ」

主の顔はにこにこしていた。

「我が家の主力商品の一つです」

「そうですね。よく売れてますね」

「ひい爺様あつてですよ」

彼はその先祖について笑顔で話す。

「僕が生まれる随分前に死んでますけれどね」

「そうですね」

「さて、それじゃあ」

そのワイン二本とだ。肉の燻製を出したのだった。

「どうぞ」

「有り難うございます。今夜はこれを」

「飲まれますね」

「ええ、食べて」

そうするというのである。

「そうしますから」

「はい、じゃあそういうことで」

「酒はいいものですよ」

客は笑って話す。

「どんどん飲みますからね」

「それがうちの売り上げになりますね」

「そちらのひいお爺さん様様ですね」

「全くだす」

二人は笑顔で話をしていた。彼等はその曾祖父を褒めるだけである。

しかしその時何があったのかは全く知らないのだった。それも全くである。知る筈もないことであつた。

蔵もそこにあつたものも今はない。何一つとして。そこにあつたものは忘れられてしまっていた。完全にだ。

あの蔵があつた場所にあるのはだ。公園だった。そこで子供達が

遊んでいる。

「次はブランコに乗ろう」

「うん、そうしよう」

そこには明るい笑顔があった。だがそこにかつてあったものも誰がいたのかも子供達は知らないのだった。全ては遠い果てに消えてしまっていた。

座敷牢

完

2010・6・9

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2571p/>

座敷牢

2010年12月1日22時10分発行